

能力の原理と必要の原理

塩野谷 祐一

(財団法人 家計経済研究所 会長)

「各人は能力に応じて働き、各人は必要に応じて受け取る」。これはマルクスが『ゴータ綱領批判』の中で共産主義の原則として謳い上げたスローガンである。共産主義の高度に発展した段階では、人間疎外からの解放による人間本性の全面的な発展によって、生産力が飛躍的に向上し、生産物は泉からこんこんと湧き出る水のように生み出されるという。人々が能力に応じてつくり出した財やサービスの社会的総体の中から、人々が必要に応じて好きなものを好きなだけ受け取り、消費したとしても、社会全体として不足することはないというのである。

もちろん、これは現実の共産主義社会の姿ではない。共産主義においても資本主義においても、現実にはこのような桃源郷の原則は当てはまらない。ところが、われわれの社会において、部分的ではあるが、この共産主義の原則が実施されている領域がある。それが医療・年金・福祉・介護などの社会保障である。社会保障の原則は、共産主義の原則と同じように、「各人は能力に応じて拠出し、各人は必要に応じて受け取る」というものである。たまたま経済成長や人口増加の程度が大きいために社会の供給力が大きく、社会保障サービスに対する需要が小さい場合には、能力と必要との間にギャップが生ずることはなく、社会保障の負担と給付との間にアンバランスは発生しない。しかし、それは偶然的の僥倖であって、能力と必要との間、負担と給付との間には本来自己調整的なメカニズムは存在しないから、今日の多くの国々

に見られるように、必要が能力の限界を超え、社会保障制度が財政的な破綻に陥りがちなのは当然である。

社会保障制度の再構築に向けて多くの国々でとられている方策は、負担を増やし、給付を減らすというものである。どんなに持って回った議論をしても、結局落ち着く先はこのようなものである。しかし、それで十分であろうか。必要の原理と能力の原理とを結びつけて考え、必要と能力との分裂をなくすように制度を再構築することが必要ではないか。

社会保障制度は人間の「基礎的必要（ニーズ）」の充足に関して、社会的連帯の仕組みを用意するものである。疾病・障害・失業・貧困・老齢などのリスクに直面した人々は、人間としてのニーズの充足を果たしえないという苦境に立たされる。もちろん、自力で解決するのが筋である。しかし、個人の力を超えるほど大きなリスクが存在する。そのリスクは誰に発生するか分かっていない。誰もが同様のリスクに直面している。このように考えると、すべての個人が事前にわずかの掛け金を支払い、補償金の社会的プールをつくっておき、リスクが実際に生じた人々にそこから損害を補償するという社会的仕組みを持つことが、誰にとっても合理的である。これが保険の制度である。社会保障制度はこれを法的に強制化したものである。社会保障はけっして豊かな人々が貧しい人々に対して与える利他的な贈与でもなければ、豊かな人々の利益に反する強制的な移転でもない。それ

は不確実性の下であらゆる人々の利己心を満たす制度である。

ところで「基礎的ニーズ」の充足は、単にリスクに対する消極的対応として必要であるだけでなく、人間の能力を高め、人間本性の十分な発揮を可能にするために必要とされる。ここに必要と能力との連結の可能性が見出される。サーカス場に張られる安全網との類推によって、社会保障はセーフティ・ネット（安全網）であると呼ばれる。これは社会保障の消極的な機能を示すものにすぎない。むしろ社会保障は、スプリング・ボード（跳躍台）の比喻によって、積極的に個人の自己実現と社会活動を促進するものと考えらるべきである。このように必要と能力との分裂に代わって、必要の充足が能力を高めるという関連を考えると、これからのポジティブな社会保障の課題ではないだろうか。

それではどのような考え方をとれば、ポジティブな社会保障が得られるのであろうか。マルクスの構想は、第1に、人間の真のニーズとは人間存在の本質を実現するのに必要なものであり、第2に、真の労働とはこの真のニーズを実現するものであるというものである。彼が言おうとすることは、資本主義制度が当然視している労働のために能力を磨くのではなく、労働という活動そのものが人間の自己実現の目的に合わせて変革されなければならないというのである。マルクスはこの姿を次のような牧歌的なレトリックによって描いた。「私はまったく気の向くままに、今日はこれをし、明日はあれをし、朝には狩をし、午後には魚をとり、夕べには家畜を飼い、食後には評論をすることができるようになり、しかも猟師や漁夫や飼育人や評論家になることはない」（『ドイツ・イデオロギー』）。これが彼の言う共産主義社会であり、冒頭に掲げた能力と必要との一致を可能にする。資本主義制度のルールの下で生活の手段を得るためには、市場経済の要請に適合した労働技術の特化が必要である。しかし、人間を目的とする共産主義制度の下では、逆に経済の方が人間の自己実現という目的に適応しなければならないというのであろう。

マルクスの包括的な構想は桃源郷の幻想に終わったが、社会保障や社会政策の領域は依然としてそれを指針とすることができる。社会保障や社会政策は、社会の経済的余剰の範囲内で資源を人間存在の実現という基礎的ニーズの充足に向ける公共的活動である。人間の生存にとって必要不可欠なもの的大部分は、平均的には市場における個人消費を通じて実現される。経済発展とそれに伴う欲求の開発によって、人々の生存を賄う消費は絶えず拡大した。これが生活水準の向上と呼ばれるものである。社会の総生産物から個人消費を差し引いた残りを「社会的余剰」と呼ぶならば、資本主義制度の特徴的なメルクマールは、社会的余剰を利潤のための投資に向けるところにある。社会保障制度はもう一つの余剰の使用法であり、改めて基礎的ニーズに立ち帰って、そのニーズを満たしえない社会的弱者への所得再分配に社会的余剰を当てる。私がポジティブな社会保障と呼ぶものは、能力の欠如を補う「リスクへの対応」としての消極的な福祉政策とは違って、能力の発揮を支え、「自己実現の機会」を保障する積極的な福祉政策である。それは単に一部の社会的弱者を対象とするものではなく、すべての人々を対象とする点で包括的な体制の見直しを意味する。

ポジティブな社会保障は、個別的には医療と教育を内容とするといえれば分かりやすいであろう。両者はそれぞれ人間の身体と精神のあり方にかかわり、それらの維持向上を通じてあらゆる人々にとってめいめいの生き甲斐の達成という意味での「卓越」の実現を目指す。卓越は人間存在の質の向上を意味し、個人および社会を有徳なものとする基準である。卓越は社会のあらゆる領域における実践を通じて（マルクスの言葉でいえば、狩をし、魚をとり、家畜を飼い、評論をすることを通じて）実現されるものであって、品位ある社会は「効率」や「正義」のみによってではなく、「卓越」によって初めて可能となる。マルクスが提起した能力原理と必要原理との両立は、共産主義社会においてではなく、こうした品位ある社会においてもたらされるのではないか。

（しおのや・ゆういち）